

委員会視察報告書

委員会名	文教厚生常任委員会
視察地	東京都豊島区
調査項目	インクルーシブ遊具について
調査目的	誰でも遊べるインクルーシブ遊具の設置について、先進的な取組を学ぶことを目的に視察を行った。
日時	令和6（2024）年8月7日（水）午前10時～午前11時30分
場所	としまみどりの防災公園（現地視察）
調査概要	としまキッズパーク 2020年9月開設。面積約1,000平方メートル、小学校低学年までの子どもや障がいのある子どもたち向けの施設。 混雑を防止するために予約制。利用時間1時間。保護者を含めて最大100名程度の同時利用可能。費用は無料。 【設置経緯】 豊島区では園庭のない保育園が80%で遊び場の確保が必要であった。以前、造幣局の土地だった空き地を活用して公園を整備する計画で始まった。土地は無償で借りていて、隣には保健所もある。2019年8月、障がい者団体と区議会議員から誰でも遊べるインクルーシブ遊具設置の要望書が提出された。都内で2番目のインクルーシブ遊具設置公園である。 【年間利用者】 令和5年は約11万5千人。豊島区民32%、区外65%、団体（保育園など）3% 令和5年3月から5月まで利用者アンケートを実施した。そのうち90%が満足という回答であった。一方で、障害児の親からは、期待したほどではない、物足りないという声があり、そのような声には、ほかの公園で整備していこうという考えである。 遊具更新の際にインクルーシブ遊具を設置している。現在17か所の公園でインクルーシブ遊具を設置している。 【設置費用】 リース契約で設置から運営まで総事業費5億2,400万円（工事費2億6,000万円、設計費2,300万円、解体費4,300万円、1年間の運営費4,700万円）

視 察 の 様 子	  としみどりの防災公園での説明 インクルーシブ遊具前
質 疑 応 答	質問 1 利用者からの期待したほどでもなかったという意見の詳細を伺いたい。 回答 1 パーク内にデッキに上る階段があるのだが、車椅子だと登れない。当初からインクルーシブ遊具の設置を計画していたわけではなく、途中から変更した部分もあったので、全てフォローできてはいないが、現状で対応可能な範囲の対応としている。 質問 2 教育との連携は図っているのか。 回答 2 小学校と特別支援学級の子どもがパーク内の花壇の管理をしている。また、「公園をよくする会」には校長先生も入っている。 質問 3 西巢鴨小学校にもインクルーシブ遊具があるが、設置の経緯は。 回答 3 校庭改修の一環でインクルーシブ遊具の導入を行ったと聞いている。 質問 4 利用者は区外が多いが、その分析は行っているか。 回答 4 商業施設が近いので、ついで利用も多い。池袋駅から外に出る役割は果たしていると考えている。 質問 5 けががあったと聞いたがその対応は。 回答 5 安全面を考慮し、現在ブランコは外している。小学校の先生から、どのような使い方をしてけがをしたのかを確認し、今後の対応は検討する。 質問 6 パーク内のカフェは第3セクターで運営しているのか。 回答 6 パーク P F I を活用している。公園整備料を民間事業者から先行して出資いただき、カフェの運営収益を充てている。 公園は、UR 都市機構が整備をした。防災公園街区整備事業で、周辺の木造密集地域の改善に資する事業として位置付けられている。UR 都市機構の利点は、まず、財政の平準化である。区が土地を購入すると 1 0 0 億円の支出が必要だが、UR 都市機構

	が購入し、市が分割支払いとすることで、財政の平準化が図られる。また、国の補助金手続きの取りこぼしがない。そして統一感あるまちづくりができることも利点である。 全体190億円の事業費の中で、区の持ち出しは20億程度であり、効率よく整備した。
委員会所感	【春川敏浩委員長】 施設の敷地は、UR 都市機構が買い取り、施設は大和リースから全て賃貸しているものである。 施設の利用者の大半が区外で65%を占めており、外国人にもSNSを通して人気のスポットである。保育園児がIKEBUS（イケバス）を利用しパークに来るケースも多いと伺う。 本施設は、誰もが楽しく遊べるインクルーシブ遊具の導入をコンセプトに置いている施設である。施設内の管理はシルバー人材センターに委託しており、運営そのものが天候状況に鑑みた運営となっている。 施設内には、障がい者が休める場所が設けられカーテンで仕切られるようにしており、インクルーシブ教育の一端を感じた。 本市でも、キッズマジックが増設されるが、インクルーシブ遊具を導入することも重要であると思った。 【五位野和夫副委員長】 豊島区としてキッズパークをつくるにあたり、障がい者団体から議会へインクルーシブ遊具設置の要望があがり実現したが、公園整備におけるインクルーシブについては教育委員会との連携は不十分とのことであり、この点は柏崎市でも検討が必要と考える。 利用者の1割が障がい児の利用であり、交流の場となったとの評価がある反面、アンケートでは満足が多い中でも階段の解消が必要など、思ったほどではなかったとの声もあるとのことである。この点はリース先の業者と改善に向けた協議が必要ではないかと思う。 【星野幸彦委員】 豊島区には160か所に上る公園があり、そのうち111か所が小公園と言うことで、これらの公園の整備について中小公園活用事業に取り組んでいる。この事業の中で、限られた公園敷地の有効活用のため、より多くの子どもたちに適した「インクルーシブ遊具」の優先的導入を目指している。各公園で多様なインクルーシブ遊具を導入しているが、遊具によっては使用方法が激しかったりトラブルが発生したり、逆に障がいのない子ども（保護者）からは物足りなさを感じたりと言うことがあるようで、柏崎市でインクルーシブ遊具の導入する際には考慮検討をしっかりと行わなければならないと思った。 また豊島区最大の公園（防災公園という位置付け）内には、としまキ

	ッズパークがあり、小学校低学年・障がいのある子どもたち向けの専用施設がありインクルーシブ公園の第一歩として運営されていた。インクルーシブ遊具は何より「誰もが一緒に遊べる」を目指していることを利用者（保護者）に理解してもらうことが重要ではないかと感じた。 【三嶋崇史委員】 豊島区では、としまキッズパークを始め17か所の公園にインクルーシブ遊具の設置をしている。今後も限られた公園敷地を有効活用するために新規遊具や取替の際にインクルーシブ遊具を優先的に展開していく。障がいの有無だけでなく、誰でも共有できる遊具として注目している。しかし、設置したからインクルーシブ公園ではなく、利用者の理解と交流を目的に、安全、安心な公園を目指さなければいけないことを学んだ。柏崎市での導入の際は、ニーズとシーズの両面、安全面を考慮した協議が必要である。 【西川弘美委員】 としまキッズパークは当初プレイパークが主目的ではあったが、地元障がい者団体や複数の会派からの要望があり、現在のようなインクルーシブ遊具の導入になったとのこと。また、R a r k - P F I を利用し、デザイン性、防災公園としての機能やカフェとのコラボレーション、専用バスの運行など、まちづくりの一環として機能し、保育園や区内外の人に幅広く利用されている。教育分野との連携は別途行われていくようだが、このように先に目に見える形で公園・遊具があることにより、地域のインクルーシブに関する理解促進につながっていると感じた。企業連携や分野・担当課を越えた取組方法も参考になった。 【重野正毅委員】 豊島区は区域が狭く公園が160以上あるものの、面積1,000平方メートル以下がその中の111か所とのことで、このうち17か所にインクルーシブ遊具を設置している。今後は公園改修時に随時この遊具に交換して拡充を図っていくとしている。また、今後は数ある公園の利用については、ターゲットを絞ってその利用者に合わせた整備を進める方針とのことだった。 ただ、公園整備担当と教育や子育て担当とはインクルーシブについての考え方を共有している感じはなく、庁内としても一致させた施策としての取組までは至っていないようだった。 柏崎としては施策として複数の担当がある場合の意思疎通はそれなりに図られていると思われるが、これからもその視点で施策の確認をしていきたい。
--	---

	【上森茜委員】 としまキッズパークのインクルーシブ遊具を現地にて視察した。小学校低学年までの子どもや障がいのある子どもたち向けの施設であり、令和5年11万5千人（内32%豊島区民）利用している。親子で利用できる滑り台、ブランコ、レールバイクがあり、小さな子どもでも安心して遊べる遊具、また車椅子に乗ったまま、小さな子どもが立ったまま遊べる砂場があった。 面積は1,000平方メートルだが、コンパクトな中で親の目が行き届く工夫もされていると感じた。豊島区では区内の公園の遊具更新の際にインクルーシブ遊具を設置しており柏崎市としても障がいがある子どもない子ども一緒になって遊べる遊具を取り入れる検討をすべきだと感じた。
--	--